

活動方針

「2008年におせっ会はどこに照準をあわせるか」

2008年4月26日

昨年2007年、私たちは「おせっ会」を旗揚げした。

それは、2004年の白鷗での「つくる会」歴史教科書採択に危機感をもった数名の有志の呼びかけによって端を発した。

2005年には、小石川、両国、桜修館の3校でも「つくる会」歴史教科書が採択された。

2006年には、白鷗で、2007年には小石川、両国、桜修館の3校でも「つくる会」公民教科書が採択された。みごとなまでの4連敗である。

わたしたちの最初の発言は「つくる会の教科書を採択するな」であり、次の発言は「桜修館はダサイ」であった。

私たちの母校は、東京都立の「大学付属」高等学校である。固有名詞にならない固有名詞は旧制の伝統を引き継いでいる。もとは東京府立の「府立」高等学校の尋常科だったのである。大阪府立や朝鮮総督府立の高等学校に対する何の配慮もなく「府立」を称した先輩たちと同様に、私たちは他の都立高校を無視して「とりつ」を自称している。

「とりつ」とは何であったのか、「とりつ」の何を遺産として残さなければならないのか。東京都立大学付属高等学校が61回目の最後の卒業生を出す2011年3月までには、何らかの結論を出したい。これが、おせっ会の第一の課題である。「いざ友歌わなん、暁の歌を」は入学して直ぐに教わった文乙歌の冒頭である。現代語にすれば、「さあ、一緒に暁の歌を歌おう」という呼びかけである。「ながき夜の眠りに早や別れを告げん」と続く。その後が問題である。「我らは選ばれし明日の若人」と続く。「選ばれしもの」の意識が「とりつ」であったのか。「まなこをあげよ友」の「まなこ」を機関紙のタイトルにしているのだから選民思想とどう立ち向かうのか明らかにする義務がある。

私たちを結びつけたのは、「つくる会」の政治攻勢である。彼らは、南京大虐殺、従軍慰安婦、沖縄集団自決の3点をセットにして歴史から抹殺しようとした。権力者が歴史を書き換えるのは歴史上よく見られるが、彼らも権力を握ったと勘違いしたのである。安倍内閣が成立した瞬間の出来事である。しかし、日本民主主義の60年の伝統はそれを許さなかった。「つくる会」は出版社と政治団体に分裂したようである。彼らの残した政治的汚点が都立中高一貫校の歴史・公民の教科書としておきざりにされてはならない。これがおせっ会設立の契機となった課題であるから、白鷗・小石川・両国の4校、更に続く武蔵・北多摩とともに、「歴史修正論者」の残滓の一掃をおせっ会の第二の課題として最大限の努力をする必要がある。

現代日本の教育に大きな問題があることは事実である。歴史修正論者を一掃しても、この問題の解決にはならない。文部省から文部科学省に名前は変わったが、教育方針の右往左往の伝統は引き継がれている。かつての「とりつ」に存在したような人間による教育を回復するために、父母や教師と協力して、「おせっかい」にもひとはだ脱ぎたい。これが第三の課題である。

会員の「智恵」を結集して、これら3つの課題にから発生する具体的な活動を模索する。たとえば次のようなものがあげられている。

1. 本日の喜多先生の講演に見られるような、「・・・にとってのとりつ」を追求する。歴代校長のインタビュー、都高時報のよみなおし、などが考えられる。
2. 運動の発端となった教科書採択制度の問題を今年も取り上げて「つくる会」教科書の強圧的な採択が今後出来ないようにする。東京以外の公立中高一貫校には今年も採択がある。これらの諸組織と情報を交換しながら活動を続ける。
3. 教科書は採択の前に検定が行われる。昨年の沖縄戦問題では、沖縄現地での大規模な行動、大江裁判での勝訴などによって、文部科学省の検定体制の「偏向」振りがあらわになった。採択制度だけでなく、検定制度もターゲットにする。
4. 教科書は、学習指導要領にしたがって書かれる。新しい指導要領は、「改正」教育基本法さえ乗り越えた文部科学省官僚の作文で、管理教育の徹底を求めている。これが徹底されれば、「桜修館」には「自由と自治」の伝統はかけらさえ残らなくなるという危機感を抱かざるを得ない。
5. この4月に入学した高校1年生は、「都立大学附属高校」の最後の卒業生になる。彼らが「桜修館」の日陰者になることなく、自尊心を持って高校生活を送れるように見守りたい。
6. おせっ会は、これまで毎月例会を開いて、会員のさまざまな分野でのレポートを聞くことを実行してきた。教科書の問題だけでなく、教育の問題、文化の問題、国際交流の問題などである。

以上